

『腰折田』からはじまった すもう実践（2年生）

牧野 満（香芝市立下田小学校）

1. はじめに

私の学校がある香芝市に大相撲地方巡業がやってきて、「香芝場所」が市の体育館で開かれました。日本書紀にも登場する「腰折田」という場所に記念碑が建てられ、それを記念しての地方巡業だったようです。

この「腰折田」という地名ですが、スポーツ大辞典には、次のように記されています。「垂仁天皇七年七月七日に出雲（桜井市出雲）の土師部の祖とされる野見宿禰のみのすくねが、大和で剛力無双をうたわれた當麻蹶速たいまのけはやと相撲をとって勝ち、宿禰は蹶速の腰を折ってしまったので、蹶速の倒れたところが腰折田という地字名で残っていたという記録も見える。」

この伝承に残る「腰折田」という地名は、実は私が30年も前に探したのですが、分からなかった地名です。初めて赴任した病弱の養護学校で、体育の授業で「すもう」を行い、その時に知った「腰折田」の地名を探したのですが、奈良県のどこにあるのか当時は分かりませんでした。それ以降は「すもう」を授業でやることもなくなったので「腰折田」を

さがすこともなく分からないまま時間が過ぎてしまいました。

それが、香芝場所開催という今回の出来事で、30年来の謎が解けたのでした。自分達が住む地域に、相撲の発祥の地名が残されて

いることを知ってほしい、そして、すもうに興味を持ってほしいと思い、すもうの実践に取り組もうと思ったのでした。

2. すもう実践前史

1985年、私は病弱の養護学校に体育教師として赴任し、教師生活がスタートしました。重度の障害を持った子ども、筋ジストロフィー（以下筋ジス）の子ども、腎臓疾患の子ども、喘息の子どもなど、病弱の子どもたちは隣接する病院に入院しており、そこから本校に登校してきます。本校では、病種によってクラスが分かれており、私は喘息の子どもたちの担任となりました。教科担任制を取っており、授業では、小学部の体育と中高の筋ジスの子どもたちの体育を担当しました。

受け持った子どもの中にネフローゼと他の病気を併発したY君がいました。Y君は1年生からずっと安静の状態が続いていました。本校へ登校できないので、私が病室に行き、ベッドの横で授業を行います。病室に入るときが大変で、帽子、白衣を着け、全身を殺菌消毒してから入りました。Y君を初めて見たときは、とても驚きました。3年生なのですが、薬のせいで太り、顔がむくんで大人の顔の大きさぐらいあったのです。

体育の授業を始めるのですが、病室で何を教えていいのかわかりませんでした。初めての日、体育の副読本を開いて、体育のことについて話すのですが、それもすぐに終わってしまいます。余った時間は雑談をして終わってしまいました。困ったのは次の日からで



す。マットのビデオを見せたりするのですが、それもすぐに終わって、そんな授業を繰り返していました。

しかし、Y君の担任の先生の話では、体育の授業をととても楽しみにしてくれていると言うのです。と言うのも、Y君は運動の経験がなく、病室からもほとんど出られないので、体育の授業を受けられる事自体うれしいようでした。いつも、授業が終わると、「先生今度何すんの？」と言って来ます。情けない授業をして、申し訳ないと思うのですが、当時はその日任せの授業しかできませんでした。

こんな日々が続いて、2学期のある日、市政だよりに「相撲の発祥地、當麻町に相撲館が開館する」ということが載ってありました。Y君はテレビで相撲をよく見ると言っていたことを思い出し、相撲についてしっかり調べてみようと思いました。これは、Y君の体育が好きだという気持ちにきっちり応えることになるかもしれないと思い、私の教材研究が始まります。

市政便りを見たとき、何故當麻町が相撲と関係あるのかわかりませんでした。この時になって初めて、當麻町という地名が當麻蹶速から由来していることがわかったのです。そして、相撲の歴史を調べると奥が深く、①奈良・平安時代の節会相撲、②鎌倉・室町時代に武芸の一つとして行われた武家相撲、③室町時代の勧進相撲、④江戸時代の相撲興行など、相撲の歴史に大変興味を持ちました。

その中でも私が一番関心を持ったのが、奈良に野見宿禰が祭られている相撲神社があるということでした。相撲神社は桜井市大字あなじ穴師にあり、山辺の道（奈良盆地の東側山麓を南北に通じる最古の古道）を少し外れた所にある小さな神社です。手入れもしていないせいか、当時は草が一面に生えていました。

神社には、四角い土俵があり、そこには四本の木が植わってありました。また、歴代の横綱がこの神社を訪れた記念碑が建っていました。私は、それらの写真を撮り、後日それをY君に見せました。相撲中継のビデオを見せたり、Y君に相撲について知りたいことを出させ、私がまた調べてくるといったことを繰り返しました。Y君は大変興味を持ってくれて、私も相撲の教材研究が楽しかったです。

一方、担任している喘息の子ども達にも体育ですもうを行いました。備品でふんどしセットも買ってもらい、喘息の子ども達がすもうをとる様子をVTRにおさめ、それをY君に見せました。登校の子どもも、登校できない子どもも相撲でつながった学習を展開することができました。新任の研究授業でも相撲を行いました。

以上が私と相撲の関わりですが、この「腰折田」という地名が香芝市にあることがわかった時、病弱の養護学校当時のこと、そして、Y君や喘息の子ども達と行った相撲の授業のことが思い出されました。授業を通してすもうのことを子どもたちに伝えたいと思い実践を始めたのです。

3. すもうの授業

（1）実践のねらい

- ・さまざまなすもうのやり方を知り、勝ち負けを巡る様々な体験をする。
- ・すもうの文化的な内容に触れ、興味を持つ。

教育現場では「勝ち負けにこだわらず」とよく言われます。しかし、これは勝ち負けとは何なのかを考えさせる体験を閉ざしているという見方もできます。勝ち負けを巡って、それぞれの思いをおもいきり出させ、勝った喜びや負けた悔しさを学んでいくのも大切な学習であると考えます。やるからには、始めから諦めずに「勝ち負けにこだわって」ほし

いと思います。

また、今の子どもたちは、身体接触の機会が余りにも少ないのも問題だと感じています。体を触れ合って力比べをしたり、相手の息づかいや温もりを感じたり、このような経験が極端に不足しています。力を加えたり、力を受けたりすることを学ぶ教材としてすもうは適しています。だた、男女関係なくすもうができるのも低学年のうちです。今しかできない大切な学習だと思い、すもうの授業をスタートさせました。

(2) 対象児童 2年生1組32人

学年では4学級127名。学年でもすもうを行っています。

(3) 授業計画(全11時間)

時	学習内容	
1	土俵づくり	円を描き綱で囲う。
2	グループ内での対抗戦	・本相撲、しり相撲、ケンケン相撲でグループ内の順位をつける。 ・3つの土俵で2グループずつの試合(ローテーション)
3		
4		
5	グループ同士の対抗戦	・本相撲、ケンケン相撲、グループ同士の競い合い(対戦はランク同士)
6		
7		
8	腰折田の話	
9	トーナメント戦	まとめの試合を行う
10		
11	まとめ	授業をふり返る

(4) 授業経過

①土俵を作る 1h

1学期に6年生の市の陸上大会が私の学校で開かれました。綱引きをしていた所、綱が切れるということが起こりました。切れた綱を捨てるのはもったいないので、綱を使って土俵作りをしました。クワ、スコップ、バケツ、トンボなどを用意して、子どもたちと砂場の横に直径4.4mの土俵を作りました。地

面を耕し、その上に、砂場の砂をまきました。放課後、その周りに切れた綱を這わして、動かないようにペグで地面に固定しました。土俵の直径をどれくらいにしようか迷いましたが、地面に半径2mの円を描いてみると、直径4mは狭く感じたので、実際の土俵(本相撲の土俵=4.55m)と余り変わらない大きさにしました。



土俵をつくる

②3つのすもうでのグループ内リーグ戦 3h

まずは、グループ内での自分の実力を知るために、3つのすもうを行いました。本ずもう(土俵を使う)、ケンケンずもう、しりずもう(地面に円を描く)という3つの場を作り、6グループあるので、2グループずつ、それぞれの場所での対戦を行いました。

3回勝負で2回勝ったらその試合の勝ちとする。勝ち数の多い者から、横綱、大関、関脇、小結、前頭とする。

しりずもうの円は広くてなかなか勝負がつかないので、円を小さくしました。本ずもうでは、まわしがないので、手と手を握り合って押し合う対戦がほとんどでした。本相撲だけでなく、2つの相撲を用意したのは、偶然勝てるという場面を生じさせたかったからです。しかし、予想していたことですが、全く勝てない子どもも出てきました。



しりずもう



ケンケンずもう

本ずもう

★1回せん (		はん	対	はん)
なまえ	勝敗		勝敗	なまえ

勝 敗 勝 敗
から まけ ひきわけ

③グループ同士の対抗戦 3h

グループ内での実力がわかったところで、グループ対抗戦を行いました。

同じ力同士（例えば横綱なら横綱同士）ですもうを取る。実力が下の者は自分の得意とするやり方ですもうをすることが出来る。3回勝負で2回勝ったらその試合の勝ちとする。

自分の力に応じた者同士が対戦するように、今度は、グループでの勝ち数で勝敗がつくので、グループの仲間への応援する声も生まれました。自分の得意なやり方を選ぶのですが、ほとんどが本ずもう選んでおり、ケンケンずもう、しりずもうはとても少なかったです。

グループ内ですもうを行ったときは、手と手を組んだすもうがほとんどでしたが、体を相手に当ててとる子どもも出てきました。また、引いたり、相手が出てきたところを投げたりする場面も見られました。

④「腰折田」の話

日本書紀にも出てくる「腰折田」の話をしました。「野見宿禰と當麻蹶速が相撲を取り、腰を折ってしまった所から、腰折田という地名が香芝市に今も残っている」ということを知らせました。また、保護者から10月に開催された「香芝場所」のパンフレットを貸してもらっていたのでそれも紹介しました。



遠くに二上山を眺める

⑤九州場所が始まる。すもうを観てくる宿題

九州場所が始まるので、その期間中にすもうを観てくる宿題を出しました。そして、観てわかったこと、わからないこと、感想を発表させました。すもうを観るのが初めてだったという子どもも多くいて、意外にすもうを観ていないものだと思います。

出てきた質問について、私が答えられる部分は答えて、それ以外のわからない所は、日本相撲協会に手紙を書くことにしました。

今までの取り組みと質問事項を子どもに書いてもらい投函しました。



すもうの対戦をみんなで観る

⑥日本相撲協会からの返信

日本相撲協会（相撲博物館）からの返信が届いたのが、12月になってからのことでした。子どもたちの質問にも丁寧に返事されて

子どもたちの質問事項	相撲博物館からの回答
① どうしてしおをまくのですか？	・ 自分と土俵を清めるため。(照富士が塩をまく写真)
② まわしのよこについているひもは何ですか？	・ まわしについているひもは「さがり」と言い、前を隠す意味がある。(石浦のさがりの写真)
③ まわしの色はきまっているのですか？	・ 黒・紫色系統となっている。TV放送するようになった頃から、いろんな色が使われるようになり、協会としては黙認している。
④ どうしてちょんまげをしているのですか？	・ 明治時代になって多くの人はちょんまげをやめたが、力士はちょんまげ以外は似合わないと言うことで続けられた。頭を保護する役目もある。(白鵬の大銀杏とふだんのちょんまげの写真)
⑤ どうしてはだかですもうをするのですか？さむくないのですか？	・ 平安時代から続く伝統。純粹に力を比べるための格好だと思う。普段は和服を着て、寒い冬にはコートも着る。
⑥ かったときにもらうのは何ですか？何が入っているのですか？	・ 懸賞と言って、中にはお金が入っている。幕内の取組には、お金をかけることができ勝者に渡される。
⑦ どうして土ひょうは高いのですか？あぶなくはないのですか？	・ 土俵の高さは約 60 cm。これは、①見やすくするため、②ケガをしないようにするための2つの意味がある。高くすることで、受け身をとる時間が確保される。

いて、また、写真入りの資料も添えてあり、子どもたちは大変感激していました。

の行われる両国国技館に行き相撲博物館の方に直接渡すことができました。

⑦ トーナメント戦 2h

- ・ 強さが下の者は自分の得意とするやり方ですもうをすることができる。
- ・ 3回勝負で2回勝ったらその試合の勝ち。

決勝戦では、体格の大きい女の子Aと小さい男子Tとの対戦になりました。Tは何度も投げられても、踏ん張って残っていたので、周囲が自然とTを応援するコールが起こりました。とてもいい試合でしたが、2勝1敗でTが勝ちました。Tへの応援コールに対してAが泣いてしまうことが起こりました。「わからんでもないけどAはつらい思いをしたんよ」という説教じみた話をしました。

⑧ 授業のまとめ 1h

授業で撮った画像や映像を見ながら、これまでやってきたことを振り返りました。また、相撲博物館の方にお礼の手紙を書きました。後日、東京に出る機会があったので、春場所

4. すもうの授業を終えて

授業後の感想には、「勝ったり負けたりすること」「いろんな人と対戦できること」を楽しかった理由として挙げる子どもが多かったです。反対に、楽しくなかった理由には、「いつも負けてばかりだから」を挙げていました。本ずもうの他に、偶然が起こりやすい「しりずもう」「ケンケンずもう」を用意したのですが、それでも、勝てない子どもがいました。勝った喜びを味わえないまますもうの授業が終わった子どもが一人いたのです。しかし、その子は「すもうをもっとやりたい」と感想に書いています。子どもは、勝ち負けよりも、それ自体を楽しんでいたという見方ができるかもしれません。

「腰折田」という地名が地域に残っているということをきっかけに、すもうの魅力を伝えたいと思い始めた実践ですが、今行っている教材にどのようなルーツがあり、どのような変遷を経て今に至るのか、実技と同時に文化的な内容を教えることはどの教材でも必要であると考えます。